

# サンプル問題

## 目白研心高等学校入学試験問題

### 国語

#### 【帰国生入試】

##### 〈注意〉

- (一) 時間は五十分です。
- (二) 問題用紙は、一ページから十一ページまでありますので、最初に確認しなさい。
- (三) 問題は、からまであります。答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
- (四) 筆記用具はHBの鉛筆かシャープペンシルと消しゴムを用意しなさい。
- (五) 文字はていねいに、はつきり書きなさい。

受験番号
氏名

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(問題作成上本文に省略した部分があります。)

大きいということは、それだけ環境に左右されにくく、自立性を保っていられるという利点がある。動物は体の表面を通して環境に接している。サイズが大きいほど体積あたりの表面積は小さくなるので、表面を通しての環境の影響を受けにくくなると考えられる。

このよい例が体温である。サイズの大きいものほど恒温性を保ちやすい。これは、茶碗のお湯はすぐさめるが、風呂のお湯は、暖めるにも時間がかかるけれど、さめるのもゆっくりだ、というのと同じ原理である。体積は長さの三乗に比例するが、表面積は長さの二乗に比例する。だから(表面積/体積)は、長さ(サイズ)が大きくなるのに反比例して小さくなっていく。大きい風呂の方が、寒い外気に接する面積が茶碗と比べて相対的に小さいことになる。だからさめにくいのである。このことから類推すれば、サイズの大きい動物ほど環境の急激な温度変化に耐えることができるだろう。

② 体温が一定であるということには、もつと大きな利点がある。体内で起こっている化学反応の速度は温度によって変わり、温度が高い方が速度は速くなる。筋肉の収縮ももちろん化学反応にもとづいているから、収縮速度は温度によって違ってくる。だから、さつきと同じタイミングで腕を伸ばしても、そのとき前より体温が下がっていたら獲物を逃してしまふ。

これは、はなはだ都合が悪い。つまり恒温性の利点の一つは恒時性にある。温度によって時計の進み方が変わるのでは、正確な運動や細かいセイギョは困難だろう。もう一つの利点は高温性である。鳥類や哺乳類では、体温はかなり高いところで一定になっている。体温を高く保つことは、速い運動を可能にする。高温性と恒時性。これらにより、安定した正確な速い運動が保証される。こうし

た利点があるからこそ、相当なエネルギー的な代価を支払っても、鳥類や哺乳類は体温を高く一定に保っているのである。恒温動物では、体重あたりにして比べれば、サイズの大きいものほど恒温性を保つのに必要なエネルギーは少なくてすむし、変温動物といわれているものでも、サイズの大きいものは、かなり体温を一定に保っておける。恐竜が恒温動物だったか変温動物だったかに関しては議論のあるところだが、何十トンもある巨大なサイズの恐竜は、たとえ鳥や哺乳類のような体温調節機構をもっていなくとも、体温はほとんど一定だったろうと想像している人もいる。〈A〉

サイズの大きいものほど乾燥にも強い。表面から逃げていく水分の量が、相対的に少ないからである。ラクダは砂漠の船と呼ばれるが、大きな体を長い毛で覆うことにより、体表からの水分と熱の出入りをおさえ、砂漠の生活に耐えている。〈B〉

サイズの大きい方が飢えにも強い。飢餓状態では、体に蓄えられた脂肪などを使いながらしのいでいくのだが、体重が半分に減少した時点で、多くの動物が耐えきれずに死んでしまう。体重あたりのエネルギー消費量はサイズの大きいものほど少ないので、大きいものはより長期間の飢餓に耐えられることになる。もちろん、大きいものは歩く速度も、歩き回れる範囲も大きいので、その分、よい環境を求めて移動でき、その点でも飢餓や乾燥、寒冷や酷暑という環境の変化に対処する能力が高いといえる。〈C〉

③ サイズが大きいということは、一般的にいつて、余裕があるということである。動物が生きていくうえで必要な基本的な機能の種類は、サイズが変わっても、ほとんど変わらないだろう。ところがサイズの大きいものほど細胞の数は多いのだから、余裕の分を、新しい機能の開発にまわすこともできるだろう。細胞そのものの代謝にしても、大きいものでは代謝率が低いので、細胞のレベルで見ても能力に余裕があると考えてもいいだろう。だから、大きければたぶん、知能が発達する余裕もできてくるし、また大きければ長生きなので、じつく

り学ぶこともできるだろう。〈D〉

小さいものは体の割には大飯食らいである。アメリカムシクイという小さな鳥は、なんと三〇秒に一回の割で虫を捕まえて食べる。これでは安楽椅子あんらくいすに座って、よしなしことを考えるという生活は、とてもできそうにない。つまり、大きいものほど食事にあてる時間は少なくてすみ、時間的にも余裕があるということだ。

体が大きいということは、それだけ強いことを意味するだろう。足の速さや体重エでアツトウすれば、捕食者にも負けないし、食物を手に入れる際にも優位に立てるだろう。違う種の間での競争において、大きいものの方が強いことは、いろいろな場面で知られており、たとえば、アフリカのサバンナの水場での観察によると、ゾウが水を飲み終わるまで、ほかの動物はおとなしく待っているそうだ。水場での順位はゾウ、サイ、カバ、シマウマ…と大きい順になっている。また、同じ種内での比較でも、大きい雄が雌を独占してハーレムをつくるアザラシの例にオテンケイ的に見られるように、大きいものは雄同士の争いにも打ち勝って、より多くの子孫を残せる可能性が高いだろう。

こう見てくると、背が高く、給料が高く、学歴も高く、という世の女性の高のぞみは、動物学的にももつともなものに思えてくる。背の高い男性と高いものの好みの女性が組み合わされば、サイズの大きくなる遺伝子が世の中に急速に広まり、背丈はますます高くなっていくだろう。これが※1コープの法則の現代風解釈である。

さて、ここまでの話だけ聞けば、大きいことはいいことで、世の中にはサイズの大きい動物④しかいなくなってしまうように思えるが、現実はそのようではない。小さいものも、ちゃんと生きている。それでは今までの議論に、どこがおかしなところがあるのだろうか。

コープの法則の再検討が行われたのは、二〇年ほど前のことである。確かに系統をたどつてみると、進化の過程で、大きいものは遅れて出現することが多い。コープの法則は正しい

のだが、その理由は、大きいものがいつも優位だからというわけではなく、進化は小さいものからスタートするからだ、とスタンレーはアンモナイトの化石を詳細に検討して結論を出した。⑤新しい系統の祖先となるものは、多くの場合サイズの小さい動物である。哺乳類の場合もそうだったし、霊長類の場合でも、リスほどのサイズのものからスタートした。

こうして、小さいものからはじまったその系統は、時間とともにさまざまな動物を生みだしていく。サイズもいろいろと変化するが、もともとが小さかったのだから、多様性が増すにつれ、サイズの大きいものが後から出現するのは当然だ。だから大きいものだけに注目すればコープの法則が成り立つが、それは多様性が増したことの一面を見ているにすぎない。ある時代に生きていたアンモナイトの化石のサイズ分布図を描き、このような図をいろいろな時代について作つて比べると、確かに時代とともに最大のサイズは大きくなるが、サイズ分布の中央値は、時代が変わってもほとんど変化していない。

コープの法則の述べている事実は正しい。しかし、この事実だけを聞くと「※2定向進化説」や「大きいことはいいことだ説」という誤った考えに陥りやすい。科学というものは自然の一面だけを切りとつてきて考えるという性癖※3をもっている。一面だけの事実が指し示す方向が、必ずしも正しい方向ではないことを、いつも忘れないようにしたいものだ。

さて、ではなぜサイズの小さいものが系統の祖先になりやすいのだろうか。その理由は、小さいものほど変異が起りやすいことにある。小さいものは一世代の時間が短く、個体数も多いから、短期間に新しいものが突然変異で生まれ得る確率が高い。また、小さいものほど移動能力が小さいので、隣りの仲間から地理的に隔離されやすく、したがって新しく変異でつくられた集団が、独自の発展をとげる機会が多い。また、小さいものほど環境の変化に弱いので、たまたまうまく適応したものを残してあと※4は淘汰とうたされてしまうという可能性も高いだろう。こう考えると、小さいものが新しい系統の祖先になりやすいことが理解できる。

大きいものは、ちよつとした環境の変化はものともせず、長生きできる。これは優れた性質ではあるが、この安定性があだとなり、新しいものを生みだしにくい。大きいと個体数が少ないし、一世代の時間も長いから、ひとたびコクフクできないような大きな環境の変化に出会うと、新しい変異種を生み出すこともできずに絶滅してしまう。一方、小さいものは、どんどん食べられ、ばたばた死んでいくが、つぎつぎと変異を生みだし、「へたな鉄砲も数打ちや当たる」という流儀で後継者を残していく。

小回りがきくことと安定していることは、相容れない性質だが、どちらを選んでも、ある程度は生きていけるものようだ。地球の環境というものは、まったく変化がないわけでもなく、かといって天変地異の連続ばかりというわけでもなかった。現在、この地球上には、大きいものも小さいものも両方生きている。これは、どちらもそれなりの生き方でやっているということの意味するに違いない。

大きいものが捕食者に食われにくいのは確かだろう。しかし、小さいものだって、そもそも個体数が多いし、小回りがきいて物陰にかくれやすいという利点もあるのだから、ある程度の数は生き残っていく。

小さければ環境の変化に弱いのは確かではあるが、数が多いし、一匹の必要とする食物の絶対量は少ないのだから、たとえば干ばつときだって、どこかに水たまり一個、草一本でも残っていれば、そこにいたものだけは生き残れるだろう。一生が短いから、水のあるうちにパツと成長して卵を生み、卵で干ばつを乗り切るといふ芸当だってできる。だから小さいものは個体としての生存する確率は小さくても、種全体としてみれば、生き残る確率は、大きいものと比べて、極端に悪いわけでもないだろう。

〔本川 達雄『ゾウの時間 ネズミの時間』〕

- ※1 コープの法則 …………… アメリカの古生物学者であるコープが提唱した、同じ系統の進化の過程において、大きなサイズの種がより新しい時代に出現する傾向があるという法則
- ※2 定向進化説 …………… 生物のある形質が一定の方向へ進化し続けるという説
- ※3 性癖 …………… 性質のかたよりやくせ
- ※4 淘汰 …………… 自然の中の環境に適応した生物が残り、それ以外は死滅する現象

問一 ……線アく力の漢字は読み方を記し、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 ……線①「相対的」の対義語を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 科学的
- イ 絶対的
- ウ 安定的
- エ 必然的

問三 ……線②「体温が一定である」ということには、もっと大きな利点がある。」とありますが、それはどのような利点ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 外気の温度によって化学反応の速度が変化し、俊敏に動けること。
- イ 体温を高く保つことにより、正確ですばやい動きを確保できること。

- ウ 環境の急激な温度変化に対応でき、水分消費量をおさえられること。
- エ 筋肉の収縮速度を調整でき、エネルギーを体内に蓄積できること。

問四 ———線③「サイズが大きいということは、一般的にいつて、余裕があるということである。」とありますが、具体的にどのような余裕があるのですか。最も適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一度に必要な食事が少量ですむために、他の動物に比べて時間に余裕がある。
- イ 細胞の数が多いために代謝率が低く、新しい機能を発展させることができる。
- ウ ほかの動物に比べて寿命が長く、学習にあてる時間を多く取ることができる。
- エ 身体的にはほかの動物より強いために、隣りの仲間から地理的に隔離されやすい。
- オ 大きいものは遅れて出現するために、その時代の変化に適応することができる。

問五 次の一文が当てはまる場所として最も適当なところを、本文に記した〈A〉〜〈D〉から選び、記号で答えなさい。

頭がいいといわれているヒトやイルカは、サイズの大きな生き物である。

問六 ———線④「大きいことはいいことで、世の中にはサイズの大きい動物しかいなくなってしまうように思えるが、現実はそうではない。」とありますが、大きいことの欠点はどのようなことですか。本文の言葉を使って十五字〜二十字以内で答えなさい。

問七 ———線⑤「新しい系統の祖先となるものは、多くの場合サイズの小さい動物である。」

とありますが、それはなぜですか。その理由を解答欄の言葉に続くように本文から二十字以内で抜き出しなさい。

問八 筆者が、科学を研究する上で心がけていることはどのようなことですか。本文の言葉を使って四十五字〜五十字以内で答えなさい。

問九 本文の内容として最も適当なものを次から選び、記号で選び答えなさい。

- ア アフリカのサバンナにおける水場での行動を観察してみると、水場での優先順位は強いものほど高いことがわかった。
- イ 最近の研究により、恐竜は体温調節をする機能を持っていたことがわかり、恒温動物であったということが明らかになった。
- ウ 地球の環境は常に変化しているが、全体として見ると大きいものも小さいものもそれぞれの利点を生かして、ある程度生き残っている。
- エ ある化石のサイズの分布図を見ると、時代を経っていくにしたがってサイズの平均値が大きくなっていくことがわかる。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

高校一年生の永見典子は二年前に父が亡くなり、母の瑤子と二人で暮らしている。須賀瀬高校に入学すると、中学時代から続けていた吹奏楽部に入部するが、母はなぜか典子が部活動に打ち込むことにいい顔をしないのであった。

「ブラバンなんてなにがおもしろいのかしら。母さん、ああいったうるさい音楽大嫌い」

昔から母は、吹奏楽にかぎらず、音楽全般が嫌いだった。芸術全般というべきだろうか。その理由は、

「なんの役にも立たないから」

だった。中学時代、典子が吹奏楽部に入部すると言ったときも瑤子は大反対し、典子が三日間食事を拒否して決意を示すとようやく折れたのだ。母娘がそこまで対立していたのに、光太郎はわれ関せずといった風で、賛成も反対もしなかった。

母の瑤子は広島島の旧家出身で、幼いころに一家で東京に引っ越してきたらしく、言葉に広島訛りはほとんどない。古風で厳格な家柄だったようで、重くて暗いその家風は瑤子の性格形成に大きく反映していると思われる。光太郎は岡山の田舎の出だそうだが、ふたりは東京の金属加工メーカーで働いているときに知り合ったらしい。そのあたりのことを父も母も黙して語らない。

父も無口で地味だった。酒は飲むが飲んでも乱れない。あとは、たまにラジオを聴いたり、推理小説を読む程度でとくに趣味らしい趣味もなかったようだ。テレビもほとんど観なかったように思う。典子は、光太郎のことを「太い木の幹」のようだと思っていた。堂々として

動かず、揺すぶっても、折ろうとしてもびくともしない。頑固で、一度決めたらなにがなんでも絶対に貫きとおす性質だった。周囲との軋轢もたびたびだったように思うが、典子には優しかった。須賀瀬に越してきたからも、夜中によく、両親がもめているのを耳にしたが、一方的に母親がまくしたて、光太郎はだまって聞いているだけだった。人付き合いの悪さ、無口、頑固……などの性格は典子にも受け継がれている。今でこそクラスでも部活でも最低限の挨拶はするし、話しかけられたらちゃんと会話もするが、小学校のころは極端な人見知りで引っ込み思案だった。小二のときいきなり知らない土地に来たので、なおさらコミュニケーションが苦手になった。それが曲がりなりにもこうして他人と交流できるようになったのは中一のとき、サックスと出会えたことが大きかった。

クラブ勧誘のとき、小学校からの友だち数名となにげなく立ち寄った吹奏楽部の部室で、楽器の試奏が行われていた。まったく入部する気はなかった。それまで音楽にも管楽器にもなんの興味もなかったし、他人とかかわるのが不得手な典子には、そもそも「部活をする」という選択肢が存在しなかったのだ。友だちがトランペットやクラリネットを吹くのを離れたところからつまらなそうに見ていた典子を、ひとりの先輩が手招きして、

「きみもやってごらん」

断るのも失礼だと思い、はじめはトランペットを吹いた。まったく音が出なかった。そりやそうだよ、ね、生まれてはじめて吹いて、いきなり音が出るわけじゃないもの。つぎにオーボエとフルートを吹いた。どちらもダメ。アきてきたのでもう帰ろうと思ったとき、わりやりアルトサックスを持たされた。指の位置などを教えられたあと、

「下唇を巻きぎみにして、おもしろい息を吹きこんでみて」

言われたとおりにすると……。

びゅおーっ！

音が出た！ 想像していたよりずっとでかい音だ。しかも、手応えてこたがすごかった。楽器だけではなくて、吹いている自分までがびりびりシンドウ1しているような一体感。そして、息が肺のどから喉へ、喉から口へ、口から楽器のなかへと吹きこまれ、最終的にベルのところから再度空气中に飛び出すときには、何倍もの熱さ、何倍ものポテンシャル※2に増幅されている。

(快感…)

これまでに味わったことのないカイホウカンウだった。

(管楽器を吹くって、こんなに気持ちいいんだ…)

先輩が目を丸くして、

「おおっ、きみ、なかなかいいね。サククスに向いてる。きつとうまくなるよ」

今にして思えば勧誘時にありがちなお世辞だったのだろうが、典子は他愛なくそれを信じた。簡単な指使いも教えてもらい、すぐにドレミファぐらいなら吹けるようになった。

(なんだ、リコーダーとおんなじじゃん)

大きな音が出るのがうれしくて、何度も何度も吹いた。

「ねえ、典子、もう行こうよ」

友だちが袖をひっぱったところには、心のなかでしつかり入部を決めていたつけ③…。

「ちよっと一年、集合」

まさにマウスピースに息を吹きこもうとしたとき、オーボエの千代田美加という二年生の声が音楽室に隣接する小部屋から聞こえてきた。機嫌が悪いときの声だ。皆、あわてて楽器をその場に置き、隣部屋に移動する。そこには二年生全員がそろっていた。千代田がイライラした表情で、

「遅いよ！ 呼んだらすぐ来る。一秒でも早くって気持ちあるの？」

すぐ来たじゃないか、と思ったが、もちろん口には出さない。吹奏楽部では楽器を持った

まま走るのは厳禁である。走ってはならないが、急いでいる空気感が出さねばならないのだ。

「一秒ぐらいと思うかもしれないけど、それが積み重なって、結局練習時間が減るんだよ。

あんなたちのせいで、みんなが迷惑…」

横合いから、フルートの柿沢夏恋かきさわかれんが、

「美加。ま、それはいいから」

千代田は黙った。三つ編みに眼鏡めがねの、カッキーこと柿沢は二年のリーダー格で、「陰の部長」というあだ名がついている。三年の部長は控えめな性格で、押しの強い柿沢がまくしたけるとその意見に流されてしまうことが多い。また、柿沢は顧問教師の覚え※3もめでたく、次期部長は当確うわさという噂だった。もちろん反感をもっている部員も多いが、口に出すものはない。柿沢はわざとらしく咳払いせきはらすると、

「あのさあ、今年的一年、はつきり言ってダメダメだよ。ボンパもそう言った」

ボンパというのは顧問教師高垣のことである。鼻のしたにちよび髭ひげがあり、バカボンのパパに似ているので、縮めてボンパなのだ。五十代半ばだと思う。

「態度もなっていないし、練習もしてない。服装もだらしないし、口のききかたも最低。先輩とか顧問とかを敬エう気持ちがないんだよね」

皆、下を向いて沈黙し、説教が過ぎるのを待つ。

「とくに練習が全然足りない。そんなに楽器吹きたくないなら、吹部辞めたら？ 楽な部活、ほかにいっぱいあるよ」

「練習は…：…してます」

クラリネットの美登利祥子みどりしょうこがおそろおそろの反論した。榎大見中かしおおみちゆうという、吹奏楽部のレベルが高い中学出身で、勝ち気な性格だ。

「ふーん、あなたのいう練習って、朝練と午後練のこと？」

「は、はい」

「じゃあききますけどね、あなた、今度の譜面、ちゃんと吹けてるの？」

今度の譜面というのは、「トツカータとフーガ」のことだ。クラシックの曲で非常に難度が高い。

「——いえ」

「吹けてるなら、私なんにも言わないよ。でも、吹けてないって自分でわかってるなら、普通、朝練と午後練のほかに個人練するよね。少なくとも私らが一年のときはそうしてた。だって、先輩がたの足をひっぱることになるから。あなたが個人練しないのは、そういう気持ちがないってことよね」

そう言われても、授業中に練習するというわけにはいかないから、個人練習するには、朝練よりも早い時間に来るしかない。

「言っとくけど、私が一年のときは毎日、朝五時に起きて、七時まえには学校に着いてたわ。」

吹けてないなら吹けるまで練習するしかないでしょう。だったら、早起したらどう？ あたりまえのことでしょ。あと、昼休みとか午後練のあと夜までやるとか……いくらでも練習する時間はあるはず。なかったらあきらめるんじゃないやなくて、作ればいいのよ。わかった？」

「——はい」

「明日から毎日、全員、朝七時に集合。朝練まえにロングトーン。放課後は、練習終わってから八時までスケール。いいわね」

皆、塾が……とかご飯が……とか小声でぶつぶつばやきながらも、<sup>④</sup>正面切って文句を言う

ものはいない。

「土日ですか」

美登利がきいた。

「聞いてた？ 毎日って言ったでしょ」

「うちは家が遠いので、七時はじまりだと、親が弁当を作る時間がありません」

「親にも早起きしてもらいなさい」

「それはむりです」

「あなた、頭悪いわねえ。自分で作ればいいじゃない。それぐらいできるはず。もしくは、コンビニでなにか買ってくる。創意工夫」

「……」

そのやりとりを聞きながら、典子は<sup>※4</sup>暗澹たる気分になった。もともと彼女が吹奏楽部にいることにいい顔をしていない母親に、<sup>⑤</sup>これ以上の負担は強<sup>オ</sup>いられない。まあ、いいや。昼ご飯ぐらい食べなくても死にはしない。

「それからもうひとつ。——今度の土曜日、オーディションするから」

ざわめきが広がった。

「今回は一年生だけのオーディション。合格したら、レギュラー昇格。ダメだったら、少なくとも半年先までは補欠だから、せいぜいがんばってね」

須賀瀬高校の吹奏楽部はこの地域ではそここのレベルである。部員数もかなり多い。各パートに、定員を超える数のメンバーがいる。だから、ときどきオーディションが行われ、それに合格したものだけがレギュラーの椅子<sup>いす</sup>に座れるのだ。

「あの……半年先まで補欠ということは、コンクールには出られないということですか」

「全日本吹奏楽コンクール」の地区大会は七月か八月にカイサイ<sup>カ</sup>される。課題曲は三月ごろ、すでに発表されており、そろそろどの曲をやるか決定する時期である。今、参加できないということとは、コンクールメンバーから外されるということだ。高校の部の定員は五十五名で、

現在の部員数はぜんぶで八十名だから、二十五名は必然的にレギュラー落ちするわけである。「もちろん、今回レギュラーになれても、ついてこれなかったら途中でばんばんクビにするからね。気合い入れなさいよ」

典子が通っていた須賀瀬中学の吹奏楽部は、演奏レベルはさほど高くはなかったが部員数はそれなりに多く、典子も一時期、サクスペートのなかでひとりだけ「外で吹く」、つまり、レギュラーメンバーが音楽室で合奏しているときに、室外で練習することを強いられていたから、レギュラーになる大切さはよくわかっていた。音楽室から漏れ聞こえてくる演奏を聴いていると、家族の団らんから疎外されているようなみじめな思いでいっぱいになる。

レギュラーかどうかで扱いが雲泥の差なのは、野球部でもサッカー部でも、そして吹奏楽部でもおなじだ。たとえば野球部なら、来る日も来る日も練習しているのはいつしよなのに、グラウンドの地ならしや用具の準備、片づけなどを一手に引き受け、レギュラーメンバーの世話をしながら、卒業まで一度も試合に出ることがない三年間と、試合に出て、勝ったの負けたのと **A** 一憂する三年間とどちらがいいかといわれたら、文句なしに後者だろう。吹奏楽部も同様だ。音楽するために入部しているのに、三年間で吹くだけ、というのはつらい。レギュラーメンバーだけが、みんなで曲を作る喜び、合奏する喜びを味わえるのだ。音楽室から漏れ聞こえてくる演奏を聴きながら、まるで関係ない基礎練習をぼんやりやっている、自分がしていることが「音楽」というより「作業」のように思えてくる。

「私の話は終わり。練習に戻りなさい」

柿沢が言うと、その瞬間を待っていた千代田が間髪を入れず、

「ぼやぼやしない。急いで！」

⑦ しかたなく一年は、走っているような走っていないような「早歩き」でそれぞれのパート

へと向かった。 **田中啓文『ウインディ・ガール サクソフォンに棲む狐』**

- ※1 軋轢 …………… 争うこと
- ※2 ボテンシヤル …………… 可能性として持つ力
- ※3 覚えもめでたく …………… 信頼も厚く
- ※4 暗澹たる …………… 先の見通しが立たず、希望が持てないこと

問一 ……線アゝ力の漢字は読み方を記し、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 ……線①「人付き合いの悪さ、無口、頑固……」などの性格は典子にも受け継がれている。」とありますが、典子の頑固な性格が行動としてあらわれている部分を、本文のこれより前から十五字で抜き出しなさい。

問三 ……線②「曲がりなりに」の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 不思議なことだが
- イ 十分とは言えないが
- ウ 間違っているが
- エ 堂々とした態度で

問四 ……線③「心のなかでしっかりと入部を決めていたつけ……。」とありますが、なぜ典子は吹奏楽部へ入部を決めたのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 他人と関わるのが苦手で部活動に入る気はまるでなかったが、上級生の熱心な勧誘を

受けて内気な自分を変えたいと思ったから。

イ 音楽に興味もなく、楽器の演奏経験もなかったが、初めて吹いたサクソスの音の迫力を体感し、その魅力に取りつかれたから。

ウ もともと音楽には苦手意識があったが、サクソスの演奏の難しさによって音楽の奥深さを知り、ぜひ得意になりたいと思ったから。

エ 自分には能力がないと自覚していて、音楽系の部活動への入部はあきらめていたが、上級生からサクソスの演奏に才能があると指摘されたから。

問五 ——線④「正面切って文句を言うものはない。」とありますが、なぜ誰も柿沢に文句を言えないのですか。本文の言葉を使って三十字～三十五字で答えなさい。

問六 ——線⑤「これ以上の負担」とありますが、具体的にはどのようなことですか。本文の言葉を使って二十字～二十五字で答えなさい。

問七 ——線⑥「家族の団らんから疎外されているようなみじめな思い」とありますが、どのようなことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア レギュラーメンバーは難度の高い曲を演奏できるのに、補欠は初心者用の曲を繰り返し演奏しなければならないということ。

イ レギュラーメンバーは意欲的に練習できるのに、補欠は不満を抱えたまま日々を過ごすなければならないということ。

ウ レギュラーメンバーは校内の注目も高いのに、補欠は努力を認められる機会がなかな

か得られないということ。

エ レギュラーメンバーは仲間との一体感を味わうことができるのに、補欠は孤独な練習をしなければならないということ。

問八 空欄 **A** に当てはまる漢字二字を答え、四字熟語を完成させなさい。

問九 ——線⑦「しかたなく一年は、走っているような走っていないような『早歩き』でそれぞれのパートへと向かった。」とありますが、なぜ一年生はこのような行動を取ったのですか。本文の言葉を使って、三十五字～四十字で答えなさい。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある時、狐、餌食を求めかねて、ここかしこさまよふところに、鳥、肉をくはへて木の上にをれり。狐、心に思ふやう、「我、この肉を取らまほしく」と覚えて、鳥のあける木のもとに立ち寄り、「いかに御辺、御身はよろづの鳥の中に、すぐれてうつくしく見えさせおはします。然りといへども、少し事足り給はぬ事とは、御声の鼻声にこそ侍れ。ただし、この程せじやうに申せしは、御声もことの外、よく渡らせ給ふなど申してこそ候へ。」

※4 あはれ、一節聞かまほしうこそ侍れと申しければ、鳥、この儀を、実にとや心得て、「さらば、声をいださむ」とて、口をはたけける隙に、終に **A** を落としぬ。狐、これを取つて逃げ去りぬ。

『伊曾保物語』

- ※1 取らまほしく……………うばい取りたい
- ※2 いかに御辺……………やあ、あなた
- ※3 この程せじやうに申せしは……………近ごろ世間では
- ※4 あはれ……………ああ
- ※5 はたけける……………大きく開けた

問一 — 線①「くはへて」・ — 線②「思ふやう」をすべてひらがなで現代仮名遣いに直しなさい。

問二 — 線③『いかに御辺』から始まる狐の言葉はどこまでですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 見えさせおはします
- イ よく渡らせ給ふ
- ウ 申してこそ候へ
- エ 一節聞かまほしうこそ侍れ

問三 — 線④「この儀」とありますが、その内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 鳥がすべての鳥の中で特に美しいということ。
- イ 狐が餌をとるのに困っているということ。
- ウ 狐が鳥の声を聞きたがっているということ。
- エ 鳥の声がとりわけすばらしいということ。

問四 空欄 **A** に入る適当な語を、本文から抜き出して答えなさい。